

「JLC 日本語スタンダード」に基づいた 中級段階における文章表現指導の試み

— 「意見文」の指導を中心に —

伊集院郁子・横田淳子

(2009. 10. 31 受)

【キーワード】 JLC 日本語スタンダード、中級、文章表現、狭義の意見文、
文章構造

1. はじめに

筆者らは、昨年度より、大学での勉学に必要な日本語を各技能・習得段階別に行動目標の形で記載した「JLC 日本語スタンダード」¹に則って、国費学部進学留学生に対する大学入学前予備教育（以下、1年コース）²における文章表現カリキュラムを再考し、新たな教材を作成している³。本稿では中級段階での文章表現指導の方針について述べるとともに、中級段階での目標の一つとなっている「意見文」に関して詳細に定義した上で、日本語母語話者と日本語学習者が書いた「意見文」を比較検討し、それに基づいて作成した教材を提示する。

「JLC 日本語スタンダード」は、日本の高等教育機関で勉学・研究するために日本語を学んでいる留学生を対象とし、「アカデミック・ジャパニーズ」の教育をより効果的かつ効率的に行うために「聞く」「話す」「聞く・話す」「読む」「書く」の5つの技能を「初級前半」「初級後半」「中級前半」「中級後半」「上級」に分け、それぞれの段階における行動目標を記したものである。「JLC 日本語スタンダード」では「アカデミック・ジャパニーズ」を「大学での勉学に直接必要な日本語」と狭義にとらえ、その習得を初級段階から目標とし、従来の「一般的な日本語」の習得を目指した教育とは意識的に区別しようとしている。

¹ 「JLC 日本語スタンダード 2009 改訂版」参照。以下、「JLC 日本語スタンダード」とはこの版のことを指す。なお、JLC は Japanese Language Center の略称である。

² 東京外国語大学留学生日本語教育センター（以下、本センター）が行っている教育プログラムの一つで、1年という限られた期間で、日本語の外に理科、社会、数学等の専門科目の教育を行う。

³ 初級段階での指導とその結果の分析については、横田・伊集院（2009）参照。

政府は「留学生 30 万人計画」を打ち上げ、大学のグローバル化を推進し、2020 年までに 30 万人の留学生受入れを目指しているが、来日する留学生の多くは日本人学生と一緒に学び、日本語で授業を聞き、教科書や論文を読み、発表し、レポートや論文を書くことを目指している。留学の目的である専門が学べる日本語力を、できるだけ短期間で効率的に習得させることは、喫緊の課題となっている。本センターで長年行ってきた国費留学生の予備教育を基本としながら、新たな知見も加えて作成した「JLC 日本語スタンダードズ」に則った教材と指導法は、高等教育機関での留学生教育に参考になると思われる。

2. 1 年コース中級文章表現指導の新たな試み

2.1 1 年コース中級文章表現指導の目標

1 年コースでは 1 年を春学期 (4 月から 7 月)、秋学期 (9 月から 12 月)、冬学期 (1 月から 3 月) の 3 学期に分け、それぞれを初級、中級、上級の指導に当てている⁴。中級の指導目標を設定するにあたっては、上級の目標から逆算し、その前段階として何をすべきかを考えることとした。「JLC 日本語スタンダードズ」の上級行動目標は「社会的またはやや専門的なテーマについて、論理的な文章が書ける」であるが、学部進学留学生に対しては、特に大学入学後に要求されるレポートの書き方を指導する必要があると考えた。レポートは単に日本語の表現ができるだけでなく、内容の整理や論の進め方を含めた文章構成が必要とされる。したがって、これらの指導を行いながら、各自の専門や関心に応じた小レポートを書かせることを目標とした。

このように上級の目標を定めた上で、中級段階では、「JLC 日本語スタンダードズ」の中級前半と後半の行動目標の記述通り、「よく知っている事柄についてまとまりのある説明文が書ける」ことと「抽象的な事柄を含む内容についてまとまりのある文章が書ける」ことをレポート作成の準備段階の目標として設定した。

2.2 目標とすべき文章の種類と用語

「JLC 日本語スタンダードズ」の中・上級の学習項目の中には、「説明文」「意見文」「記録文」「レポート」「小論文」がある。中級段階で目標とすべき文章の種類について述べる前に、これらの用語を整理しておきたい。

⁴ 日本語は、初級は約 165 コマ (1 コマ = 90 分)、中級は約 100 コマ、上級は約 45 コマの授業を行っている。中・上級段階では専門科目の授業が 1 年コース全体の約半分を占めるため、日本語の授業コマ数は減っている。

保坂(1991)は、学生が書く「レポート」とは「学生が教師の要求に応じて提出する学術的な調査報告書」(p.15)で、単なる「調査報告書」ではなく「意見」や「主張」という「論が加味される」(p.16)ものだと述べている。「小論文」については、実質的にレポートとほとんど差異はないが、大学入試や入社試験で課せられるもので、目的が違うとしている(p.161)。保坂の分け方では、「小論文」は、レポートと本質的には変わらないが、選考などの目的を持ち、字数制限に従って比較的短時間に要領よくまとめなければならない種類のものとなる。

木下(1991)は、レポートを①「研究・調査などの報告書」と②「学生が提出する研究結果の小論文」(p.1)の二つであると定義し、これらは「特定の読み手－多くの場合にレポートを要求した人と同一人－を予想して書く」もので、「不特定多数の読者を予想して書く論文とはちがう」と述べ、「レポート」と「論文」を区別している。その上で、「レポートに書くべきものは、事実と、根拠を示した意見だけであって、主観的な感想は排除しなければなら」(p.2)ず、レポートでは「調査の結果を述べる記述・説明文」と「論理を展開する文章－論述文－」(p.129)が必要だと述べ、これらをまとめて「説明・論述文」と呼んでいる。

これらの記述から、学生の書く「レポート」は特定の読み手を予想して書くもので、「事実を述べる説明部分」と「根拠を示して意見や主張を展開する部分」の二つから成ると言える。前者については「事実文」または「説明文」と称することが多いようであるが、本稿では「説明文」を使うことにし、「記録文」は「説明文」に含まれるものとする。後者については、「意見文」「論述文」「論説文」などが使われているが、これらの用語は明確に定義されていないことが多く、議論を混乱させている面がある。後者を意味する用語について少し細かく検討したい。

木戸(2007)は、「理由を述べながら賛否を表明するという書き手個人の主観性が強い」(p.289)文章を「意見文」とし、「問題提起をした上で、よい面・悪い面を説明して意見を述べるという実証性や客観性」(p.289)をもった文章を「論説文」として、意見を述べる文章を「意見文」と「論説文」の二つに分けている。

藤村他(1995)では、1年コースにおける中級作文教育に関する報告において「後半期には小論文を書く前提として意見文を書かせている」(p.98)と述べ、「大学入試、さらには大学で論文を書かねばならぬことを考えてこの段階(筆者注：中級後半)の最終目標は小論文を書くこととした」(p.99)と記している。また、「小論文」を「論理的文章のあまり長くないもの、作文の中で、論説・評論的要素を含むもの」「そう長くはなくても、ある主題(テーマ)を客観的に捉え、一般論の形で論じたもの」

(p.99) と定義している。藤村他 (1995) では「小論文」は大学入試などで要求される形式のものと考え、「意見文」は投書なども含めた意見を述べたもの全般を指していることがうかがえる。

1年コースの主教材である『中級日本語』の教師用前書きには「意見文や論説文を書いたりする際にも活用できるようにしてある」と書いてあり、「意見文」「論説文」を書くことも念頭において作成されたことがうかがわれる。『中級日本語』では説明文のほかに、投書、新聞記者や論説委員が執筆したコラム、学者や教育者が書いた随筆がそれぞれの課で取り上げられている⁵。これらは書き手の考え・意見が述べられていることから、教科書作成の際に「意見文」や「論説文」に分類されたと考えられ、実際、藤村他 (1995) では、学生に自分の意見を書かせるときに対応する課としてこれらの課を挙げている。また、金子 (2005) では、投書するという設定で教科書の本文を使って意見を述べる活動をするために「・・・はとても我慢できません」というような主観的な表現を書く際の枠として取り上げている。しかし、投書には体験や感動といった個人的経験から発した主観的感想に近い表現も多く、投書での意見の述べ方はレポートの中で使うべき意見の述べ方とは異なると考えられる。

論理性を重視するレポートでは主観的表現を排除することが重要になる。教育期間に余裕がある場合は、投書やスピーチなどでの意見の述べ方を含め、さまざまな意見の述べ方を指導していけるが、1年コースのように期間が限られている場合は、より直接的にレポートにつながる意見の述べ方を教育したほうが混乱が少なく効率的なのではないだろうか。

以上で検討したように、「意見文」の捉え方はさまざまであるが、本稿では、投書や随筆などでの主観的意見を述べた文章も含むものを「広義の意見文」と捉え、「レポート」の「根拠を示した意見や主張を展開する部分」を「狭義の意見文」と呼ぶことにする。これは木下 (1991) の「論述文」や木戸 (2007) の「論説文」とほぼ同じものである。なお、「小論文」は、文字通り論文の小さいもの、「レポート」と同じもの、時間的・量的制限が課せられた試験のような特殊な形式での「意見文」というように、人によって意味するものが大きく異なり、混乱の要因となるので、本稿では用いないこととする。

⁵ 採択されている識者の書く随筆や新聞等のコラムは、基本的には個人的体験に基づく主観的な判断が多い。学問的知識や経験が豊富な識者の判断には読むべき内容も多いが、学生が文章を書く際のモデル文としては必ずしも適切なものではない。書く立場の違いから、コラムや随筆で使われる表現には学生がレポートで使用するものとしては不適切なものも含まれている。

2.3 指導項目と指導法

用語の定義を踏まえた上で、中級文章表現の指導目標として、レポート作成の下位項目である「説明文」と「狭義の意見文」を立てた。以下、本稿での「意見文」とは「狭義の意見文」のことを指す。

「説明文」の学習項目は、過去の学生が冬学期に作成したレポートの中から実際に使用される可能性の高い機能として「分類」「定義・説明」「引用・要約」「図表を使った説明」「比較」「理由・原因」を選んだ。指導法としては、例文を使って機能とその代表的な表現を示し、簡単な練習問題で理解を深め、実際に機能を表す表現を使った短い説明の文章を書かせることによって、正しく使えるようにした。

「意見文」の指導では、主教材『中級日本語』から適切なモデル文が抽出できないため、新たに「意見文」のモデル文を作成し、意見を述べる際の展開パターンに注意を向けたり、接続関係に着目しながら文章を作り上げたり、文章の段落構成を考えたりする活動を通して、論の展開を意識させるよう心がけた。具体的には「小学校から英語教育を始めるべきだ」と「インターネットでニュースが見られるようになった現代には、新聞は不要だ」の二つを取り上げたが、指導時間の制約上、参考資料等を使ってディスカッションをする時間は十分にとれなかった。

表1に指導項目と表現例を示す。1回の授業時間は半コマ(45分)で、授業時間内に書き終わらない練習問題は宿題とした。また、レポート作成上必要な書き言葉的表現や語彙、記号の使い方も指導の対象とした。④⑨では、授業時間内に「説明文」600字程度、「意見文」800字程度を完成させ、評価の対象とした。

表1 中級教材の全体像

	指導項目	表現例
①	1 分類 【書き言葉①文末】	～は・・・によって、A、B、・・・に分けられる
②	2 定義・説明【書き言葉②文中】	～とは、・・・のことである
③	3 引用・要約【記号の使い方】	～は「 」と述べている／～は・・・と述べている
④	「説明文」の執筆	
⑤	4 図表を使った説明	図(表)は・・・を示している (図1からわかるように)～は・・・である ～は・・・を超えている／に過ぎない

⑥	5 比較の述べ方	(Aは)Bと比べて／(Aも)Bと同様に／ (Aは)Bと異なり／それに対して／一方
	6 理由・原因の述べ方	～ため、・・・／・・・のは、～ためである
⑦	7 意見の述べ方	～と思う／～だろう／～のではないだろうか ～と思われる／考えられる
⑧	8 「意見文」の構成【接続表現】	まず／また／さらに／以上の理由から
⑨	9 「意見文」の執筆 注：この回のみ、1コマ(90分)を当てている	

次節では、「意見文」に焦点を絞り、新しい教材作成の試みについて報告する。教材作成に際し、日本人大学生が執筆した「意見文」と2007年度に本センター1年コースの学生が執筆した「意見文」とを分析し、その結果を参考にした。1年コースの最終目標が、大学での勉学に必要な日本語を習得することであるなら、大学で学ぶ日本語母語話者と同程度の文章表現能力が習得できれば、当面の目標は達成したと考えられる。そのため、日本人大学生が執筆する典型的な「意見文」の型を抽出してモデルとして示そうと考えた。

3. 「意見文」の分析と教材作成

「アカデミック・ジャパニーズ」の最終目標であるレポート・論文作成には言語的知識だけでなく、内容を考える力・それを構成する力・形式を整える力などが要求される(横田2008, p12)。このうち、言語的知識以外のものは、文章表現指導を通してしか養成できない。また、評価的観点から考えても、「日本人による作文評価基準では内容や構成が重要視される」(田中他1998a,b)という指摘や、「作文評価においては、大きく分けて文法面よりも構成面が重視される」(長谷川2008, p23)という先行研究もあるため、本分析では、構成とそれに付随する内容面に焦点を絞り、教材作成の参考とすることとした。

3.1 データの概要と分析の方法

分析に利用したデータは、日本語学習者による「意見文」(以下、NNSデータ)と日本語母語話者による「意見文」(以下、JPデータ)各45で、1作文あたりの文字数は800字程度である。NNSデータは、2007年度に1年コースに在籍していた学生が11月初旬に宿題として課されたものであり、宿題という性質上、時間制限も辞書使用の制限もなく書いたものである。JPデータは、東京都内の大学に通う日本

人学生が執筆したもので、60分という限られた時間内で辞書を使用せずに書いたものである⁶。両データとも、インターネットと新聞の必要性をテーマとしているが、NNSは「インターネットさえあれば新聞や雑誌はいらない」または「新聞や雑誌があるからインターネットはいらない」という意見に対して反対意見を述べるよう指示されたのに対し、JPデータは反対意見に限定されていないという点で、若干の相違がある。

このようなデータを電子化し、「主張」「背景」「問題提起」「根拠」「譲歩」「展望」「文章展開の予告」など、文機能をコーディングしたデータベースを作成した。

表2 データの概要

	JP		NNS	
	総数	平均	総数	平均
作文数	45		45	
文数*	738	16.4	787	17.5
段落数	198	4.4	229	5.1
辞書使用	不可		可	
時間制限	60分		なし	

*文数にはタイトル文の数は含まれていない。

3.2 分析の結果

3.2.1 文章構造の型

文章構造の型は、「はじめ(頭)」「なか(中)」「おわり(尾)」⁷のどの部分に強い主張が現れるかによって表3のように分類した⁸。分類の結果は、表4に示す。

⁶ 平成19年～22年度文部科学省科学研究費若手研究(B)「日本語母語話者と日本語学習者の意見文におけるモダリティ使用」(研究代表者:伊集院郁子, 課題番号19720119)の助成を受けて収集したデータの一部を用いた。

⁷ 「はじめ(頭)」は第一段落、「おわり(尾)」は最終段落、「なか(中)」はそれ以外とした。

⁸ 文章構造の分類に際し、佐久間(1990)、木戸(1992)を参考にした。これらの研究では、文章構造の型として、「頭括式」「中括式」「尾括式」「両括式」等の用語が使われているが、本分析は文章全体をまとめる統括機能のある「段落」を単位とした分析ではないため、同じ型名を用いるのは避けた。

表3 主張の現れる位置による文章構造の型

文章構造の型	はじめ	なか	おわり
頭型	○*	-	-
中型	-	○	-
尾型	-	-	○
頭尾型	○	-	○
頭中型	○	○	-
中尾型	-	○	○
分散型	○	○	○

*表中の○は、強い主張が現れることを示している。

表4 文章構造の型による作文数

文章構造の型	JP	NNS
頭型	2	8
中型	0	0
尾型	4	1
頭尾型	30	31
頭中型	1	0
中尾型	8	1
分散型	0	2
判定不能	0	2
合計	45	45

JP、NNSともに、頭尾型が最も多く見られた⁹。「意見文」の「はじめ」と「おわり」で主張を述べることは、読み手に主張が伝わりやすい典型的な構造だと考えられる。しかし、JPには、「なか」と「おわり」で主張を述べる中尾型も8例見られた。この型の典型的な展開パターンは、「はじめ」に「背景」や「問題提起」を述べ、「なか」で「主張」及びその「根拠」を挙げたのち、「おわり」にもう一度「主張」を繰り返すというものであった。

初級の文章表現指導では、3部構成での執筆を徹底してきたが、中級段階での「意見文」の作成においては、JPに典型的に見られた頭尾型の文章構造でモデルを提示し、学生にもわかりやすい型として奨励するのがよいと考える¹⁰。また、JPでは45例中42例が「おわり」に主張を明示する型を用いていることから、まずは「意見文」の末尾で必ず主張を明確に表すよう徹底することとした。

3.2.2 内容面の分析

文章構造の型には、JPとNNS間に大きな違いは見られなかったが、意見の内容をみると、主張が理解しやすい「意見文」と、読みにくく説得力のないものとの間に相違が見えてきた。それらを、①「文章展開の予告」、②「展望の記述」、③「見せか

⁹ 分類の際に、主張を支える根拠が不適切なものや主張のサポートにならないものも見られたが、「はじめ」と「おわり」に主張が明記されているものについては、「なか」の根拠の説得力の如何によらず、頭尾型に分類した。詳しくは3.2.2の③「見せかけの論理」で述べる。

¹⁰ 授業時間に余裕がある場合は中尾型の例も示し、頭尾型との構造の違いを比較、評価したり、「主張」を述べる前段階として、背景的情報を提示した上で主張文を出すような型に挑戦してもよいだろう。

けの論理」と「接続表現の乱用」、④「譲歩のし方」の4つの項目に分け、順に見ていく。

①「文章展開の予告」

以下に挙げる例は、文章の展開や構造に関わる言及であり、読み手の理解を助けるために有効に機能していると考えられる。

- JP001-03¹¹ しかし、私は以下の4つの理由から、新聞や雑誌は今日においてもなお必要であると考ええる。
- JP005-02 その理由をあげてその後説明を加えたい。
- JP007-04 以下に新聞や雑誌のメリットを挙げていきます。
- JP021-02 理由は以下の通り三つである。
- JP041-02 ここでは話をわかりやすくするために新聞に絞って考えることにする。

JP001-03では、主張を述べる文の中に「以下の4つの理由から」という表現が組み込まれているが、その他の4つの例では、一文全体が「文章展開の予告」となっている。主張に続くこれらの表現は、その後の論がどのように展開していくかを示しており、読み手の理解を助ける働きをしている。

次のNNS010-05も、これと似たような機能をもつものであるが、「作文で理由を説明する」のは当然のことであるため、05の一文が読み手に効果的に文章の展開を示しているとは言い難い。「以下に理由を4つ挙げて説明する」¹² など、少し修正を加えるだけで、読み手に効果的に働くのではないだろうか。

- NNS010-04 私は新聞や雑誌があるから、インターネットはいらないという意見に反対である。
NNS010-05 この作文で理由を説明する。

また、以下のNNS016-03では「大きい理由」という抽象的な書き方をしているが、続く文章展開の中では、「まず」、「また」、「さらに」という接続表現を用いて3つの具体的根拠を列挙している。この場合、「私は次の3つの理由で、その意見に反対である。」とした方が、展開が理解しやすくなるだろう。

- NNS016-03 私は次の大き理由で、その意見に反対である。

「文章展開の予告」は、このようなわずかな工夫でも読み手の理解を助けるため、学生に明示的に指導していくことで文章全体の改善につながると思われる。よって、学生に提示するモデル文にも取り入れ、その一文が文章全体の中でどのような役割

¹¹ JPに続く数字は、「執筆者のID番号(3桁の数字)・文番号(2桁の数字)」を表す。JP、NNSともに例文はいずれも原文のまま、誤用の訂正は行っていない。

¹² 下線は、NNSの作文に加筆修正した箇所を表す。

を果たしているかを考えさせた上で、積極的な利用を促すこととした。

②「展望」

「意見文」の末尾で「これからも／いつまでも／将来は、～だろう」といった表現形式を用い、将来の「展望」を述べたものがNNSに7例見られた。これらは『中級日本語』11課の本文¹³に影響されたものと考えられるが、反対意見を述べるように指示された「意見文」の締めくくりとして、ふさわしいものとは言えない。次に示す例は、あたかも専門家のような立場で将来の「展望」を記したことによって、執筆者自身の「主張」が伝わりづらくなっている。

- NNS006-12 しかも、ネットから望んだ情報を得ることに限らず、好きな音楽を聞いたり、映画を見たり、友達と互いにメールとか写真とか交換したりすることができる優れた点もある。

NNS006-13 こうして見ると、情報の世紀に生活している私たちにラジオや新聞やテレビなどよりネットの使用はもっと増えて行くのにちがいないだろう。(末尾)

- NNS036-18 しかしインターネットは要らないと言えよう人もいるがどちらかというインターネットのないところは知識の砂漠だとよくいわれている。

NNS036-19 だから私達の日常生活にインターネットは欠かせないものになってこれからも人間とインターネットの結びはどんどん強くなるにちがえないだろう。(末尾)

NNS006-13は、「以上の理由により、情報の世紀に生活している私たちにとって、ネットの使用はこれからも不要になることはないと考える。」とした方が主張が伝わりやすい。NNS036-19は、18で中途半端に主張を譲歩している問題点も含んでおり、文章構造の修正が必要となるが、締めくくりの文章を「知識の砂漠状態にならないために、私達の日常生活にインターネットは欠かせないものなのではないだろうか。」と修正するだけでも、主張に一貫性が生じる。先に述べたように、「意見文」は「おわり」にもう一度「主張」を置く頭尾型の文章構造が基本構造だとすれば、「展望」を述べるより、再度「主張」を明示して文章を締めくくった方がよいのではないだろうか。

また、次に示すNNS033の例は、「おわり」に「新聞や雑誌がいらなくなることはまだ起こらない」と主張しているものの、意見を述べるのに適切な言語形式を使用

¹³ 「ガラスの利用」という課で、本文は「私たちの暮らしとガラスとの結びつきは、これからもいっそう深まっていくにちがいない。」という文で締めくくられている。

せず、末尾の一文に余計な「展望」を加えたために、まとまりを欠いてしまっている。15を「したがって、インターネットによって、新聞や雑誌がいらなくなることはないと言える。」とし、16は削除した方が、「意見文」の締めくくりとしてはふさわしくなる。

- NNS033-15 したがって、インターネットによって、新聞や雑誌がいらなくなることはまだ起こらないのである。

NNS033-16 しかし、将来はどうのようになるか、科学の進歩次第だろう。(末尾)

学生は主教材である『中級日本語』の本文を文章表現のモデルとしても利用しようとするため、本文の読解に際しては、書かれている文章のタイプや書き手の立場を考えさせることが必要となるだろう。

③「見せかけの論理」と「接続表現の乱用」

注9で触れたように、分析した「意見文」には、「はじめ」と「おわり」に一貫した「主張」が繰り返されているものの、「なか」で挙げられている「根拠」等に説得力がないものも見られた。また、学んだ接続詞を積極的に用いて論理を構築しようとしているものの、むしろ接続詞に頼りすぎて文と文の関係が把握しづらいものも多い。以下のNNS005がその一例である。接続表現は□で囲って示し、段落の開始箇所は空欄を一文字分設けて示した。

- NNS005-01 私は「新聞や雑誌があるから、インターネットはいらない」という意見に反対である。
- NNS005-02 □というのは、今ではインターネットが一つの情報源であることに限らず、様々な領域に使用されている。
- NNS005-03 □まず、伝達の面から考えてみよう。
- NNS005-04 □同じ国にしても、海外にしても、インターネットを通して、だれとも接触することが容易にできる。
- NNS005-05 □更に、そのためにインターネットを利用するのにお金がかからず、役立っている。
- NNS005-06 □また、インターネットはそれだけに有用なことであるかといえば、そうではない。
- NNS005-07 □インターネットのあるコンピュータを用いて、ゲームや映画などによって、暇な時を楽しませるようにすることができるのは当たり前であろう。
- NNS005-08 □更に、インターネットによる情報は、新聞や雑誌と違って、非常に限られていない。

NNS005-09 例えば、インターネットにおいて自分の国のニュースのみならず、世界の隅々で起こっている事件を調べることが簡単である。

NNS005-10 このように、論文などを構成する時に直接にできるそうである。

NNS005-11 しかし、「インターネットさえあれば、新聞や雑誌はいらない」と言えるかどうか。

NNS005-12 人によってこの問題に対する意見は違う。

NNS005-13 新聞や雑誌を読むに間して特別な気持ちを特つものもある。

NNS005-14 それなのに、そのように考える人はきわめて少ない。

NNS005-15 だから、「新聞や雑誌があるから、インターネットはいらない」という意見に対して反対なのである。

NNS005 の文章構造は、01 と 15 の文で同じ主張を繰り返し、典型的な頭尾型であるように見える。しかし、「なか」を読むと、接続詞を使いすぎていること、使い方に誤用があることから、どこからどこまでが第一の根拠なのか、全部でいくつの根拠が挙がっているのか、その論理構造がつかみにくい。さらに、「しかし」で始まる第6段落目で、別の立場からの意見について考慮しようとしたために、かえって結論部分へのつながりが悪くなっている。

主張を支える根拠に説得力があり、結論が自然に納得できるような論理構造で「意見文」を執筆するためには、「はじめ」と「おわり」に主張を置いて頭尾型にするだけでなく、どのような根拠をどんな順序で組み立てるのか、執筆にとりかかる前に整理しておく必要がある。外国語を使って根拠を整理するのは難しいため、はじめから個人作業で行わせるのではなく、教室内で、論旨のまとめ方や提示の順序などを指導し、アウトラインを書かせ、論旨の明確化をはかることが重要である。このような考えから、教材作成に際しては、モデル文を読んで、論拠がどのような順でいくつ挙げられているかを考え、文章構造を分析した上で、それらを参考に各自の「意見文」のアウトライン作りに当たらせることにした。また、論拠をグループで話し合い、その中から自分の「意見文」の執筆に用いるものを選ばせるような練習も取り入れた。

また、学んだ接続詞を積極的に使用すること自体は否定すべきでないが、接続詞がなくても文と文の関係が理解できるような論理展開を組み立てる方が重要である。文章表現においては2文レベルで接続関係を構築していくより、段落間のつながりを明示するような接続表現の使用¹⁴を中心に指導することが必要となるだろう

¹⁴ JPに見られた接続表現の使用例は、④「譲歩」で挙げたJP018の中に□で示した。

う。このような考えから、「意見文の構成」とともに授業で扱う「接続表現」の教材には、「順序等を述べるもの(まず、次に、それから、最後に)」、「理由等を列挙するもの(第一に、第二に、第三に)」、「結論を述べるもの(以上の理由から、したがって)」の3種に絞って提示することとした。

④「譲歩」

先にNNS005で見たように、NNSの「意見文」には、起承転結の「転」に当たる個所で「譲歩」し、別の立場からの解釈も試みようとしたものの、最終的には強引に自説を繰り返して結論付けるだけの余計な「譲歩」の記述が少なからず見られた。このような強引な論理展開をもたらすだけの「譲歩」は、むしろ削除した方が論旨が明快になってよいだろう。JPにも「譲歩」は多く見られるが、自説を打ち出す際に利用するような位置づけが多い。JP018は、03の後半部で「主張」する前段階として、02と03の前半部(~~~~部)に「譲歩」を位置付けている。「インターネットの特徴は把握しているが、新聞や雑誌にはインターネットにない利点がある」ということを述べているのである。

- JP018-01 近年コンピュータの技術が発達しインターネットが至る所で使えるようになりました。
- JP018-02 インターネットは情報の相互伝達ができデジタル情報のため持ちはこびも自由でしかも環境にも負担をかけないので究極のメディアであるという人がいます。
- JP018-03 私はその点に関して賛成ですがその特徴により新聞や雑誌を駆逐してしまうとは考えられません。
- JP018-04 その理由としてまず第1に情報の視認性があります。
[中略]
- JP018-10 第2の理由として私が挙げたいのは操作性です。
[中略]
- JP018-12 最後に情報の確かさが挙げられます。
- JP018-13 インターネットは誰もが情報発信できる反面、間違った情報が流れる可能性や改ざんの危険性があります。
- JP018-14 これに対して新聞・雑誌はそれを職とする執筆者がいて内容も校正を経ているため相対的に情報の信用度は高いと言えます。
- JP018-15 以上のことからインターネットが普及しても新聞、雑誌は必要であると私は考えます。

JPには、他にも「譲歩」が「主張」や「根拠」を導くために用いられる例が多く見られたが、「譲歩」は位置や表現を誤ると論旨全体を不安定にさせてしまうため、その効果的な使い方については時間をかけて検討しなければならない。今回の教材作成では、モデル文に「譲歩」を取り入れることはあえて避け、まずは主張の伝わりやすい一貫性のある文章をまとめることを目標とすることとした。しかし、意見を述べる際には、単純に自説を支える根拠を並べるだけでなく、是と非の両面から物事を捉えた上で判断する姿勢も必要とされる。そのような視点をどの位置にどのように盛り込むかについては、上級以降の課題としたい。

以上の分析を参考に作成した教材の一部（「意見文の構成」の練習の部分）を巻末資料¹⁵として提示する。

4. おわりに

以上、2008年度より始まった1年コースでの文章表現カリキュラムの試みについて、中級段階の全体的な構想と「意見文」に関する教材の作成を中心に報告し、主教材である『中級日本語』では扱われていない文章表現ならではの表現や機能を導入する必要性や、逆に『中級日本語』で学んだことを文章表現に取り込むことによって生じる弊害についても触れた。本センターの1年コース秋学期は、『中級日本語』の文型・語句と本文読解に時間を要し、まとまった文章表現カリキュラムの時間を確保するのが難しかった。しかし、今後、主張を支える根拠の示し方をクラスで議論しながら論の流れを組み立てたり、いったん譲歩した上で自分の主張を強化させるような複雑な論の組み立てを練習するためには、文章表現の時間を積極的に確保していく必要があるだろう。

また、藤村(2007)にも報告されているように、作文のモデルとなる文章を既読の精読教材から選び、その型を利用して産出する練習ができれば、授業時間の節約にもつながる。そのためには、文章産出の型として利用するのに適切な精読教材を選択し、読解カリキュラムと連携して「読み」から「書き」へとつなげるようなカリキュラム体制の構築が必要となるだろう。

¹⁵ 紙面の都合上、体裁などには修正を加えてある。

参考文献

- 金子比呂子 (2005)「中級文章表現の試み—上級に向けて」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』31号 pp.213-226
- 木戸光子 (1992)「文の機能に基づく新聞投書の文章構造」『表現研究』55号 pp.9-19
- 木戸光子 (2007)「文章構造分析の応用—『似て非なる文章』を意識化する作文教育を目指して—」『2007年度日本語教育学会秋季大会予稿集』 pp.288-289
- 木下是雄 (1991)『レポートの組み立て方』ちくまライブラリー 36 筑摩書房
- 国立国語研究所編 (2004)『論理的文章作成能力の育成に向けて』日本語教育ブックレット5 平成15年度国立国語研究所日本語教育短期研修・報告書
- 佐久間まゆみ (1990)「ケース8 文章の構造類型」寺村秀夫・佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一編『ケーススタディ 日本語の文章・談話』おうふう pp.94-105
- 田中真理・坪根由香里・初鹿野阿れ (1998a)「第二言語としての日本語における作文評価基準—日本語教師と一般日本人の比較—」『日本語教育』96号 pp.1-12
- 田中真理・初鹿野阿れ・坪根由香里 (1998b)「第二言語としての日本語における作文評価—『いい』作文の決定要因—」『日本語教育』99号 pp.60-71
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター (1994)『中級日本語』凡人社
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター (2009)『JLC日本語スタンダードズ 2009改訂版』
- 長谷川哲子 (2008)『誤用とその問題点の分析に基づいた日本語アカデミックライティング教材の開発』平成18年度～平成19年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書(課題番号18520415)
- 藤村知子・金子比呂子・伊丹千恵 (1995)「橋渡しの中級作文教育—初級作文からレポート・論文へ—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』21号 pp.97-126
- 藤村知子 (2007)「『中級日本語』を使った読解から作文指導へ—e-learning教材 JPLANG中級『表現練習』について—」『日本語学・日本語教育国際シンポジウム論文集』ハノイ国家大学外国語大学 pp.71-81
- 保坂弘司 (1991)『レポート・小論文・卒論の書き方』講談社学術文庫
- 横田淳子 (2008)「初・中級での書く技能の指導—アカデミック・ジャパニーズを意識して—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』34号 pp.11-26
- 横田淳子・伊集院郁子 (2009)「『JLC日本語スタンダードズ』に基づいた初級段階における文章表現指導の試み」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』35号 pp.87-102

【課題】 次の文章を読み、理由を示しながら自分の見解・主張を述べなさい。

ABC社が「新聞に関するアンケート」の結果を発表した。それによると、20代の37.2%が新聞を読んでいないことがわかった。新聞を読まない理由の7割が「インターネットでニュースを得ているから」であった。

インターネットでニュースが見られるようになった現代には、新聞はもう不要なのではないだろうか。

【解答例】

インターネットの普及によって、現代人はかつてないほど多くの情報を手に入れることができるようになった。世界各地のニュースがインターネットで刻々と伝えられるため、新聞は世の中から消えてしまうのではないかという考えもある。しかし、私はこれからも新聞は必要であると考えている。その理由として、以下の3点が挙げられる。

まず、インターネットでは情報があまりにも多いため、どの情報が重要なのか判断しづらい。パソコンの画面をクリックしていくうちに、大切な情報を見失ってしまう恐れもある。それに対して、新聞では、一定の枠の中に事件や出来事が簡単にまとめられていて、容易に有益な情報にたどりつくことができる。

また、新聞の情報はインターネットに比べ、信頼性が高いと言える。だれでも自由に情報を公開できるインターネットに対し、新聞はその内容に社会的責任が求められるため、情報が真実であることを確認した上で記事にしているからである。

さらに、新聞には、持ち運びが簡単でどこでも見られるという優れた点がある。インターネットの場合は、ニュースを得る条件として、パソコンなどの道具とインターネットにつながる環境が必要である。

以上の理由から、インターネットでニュースが見られるからといって新聞は不要になるわけではないと考える。両方の長所を利用して、上手に使っていく必要があるだろう。

【解答例】を読んで答えなさい。

- ① 論拠（理由）は全部でいくつ挙げられているか。
- ② 論拠は何か。説明しなさい。
- ③ 全体の構成は次のようになっている。それぞれ、どこからどこまでか。

